

# こんなときだからこそ

県内のトップスポーツチームが頑張っています。

にかほ市をマザータウンの一つとするブラウブリッツ秋田。開幕から破竹の勢いです。3年ぶりのJ3優勝と、念願のJ2昇格に向けまっしぐらです。

TDK硬式野球部。都市対抗野球、東京ドーム出場です。東北大会を制しての東北ブロック第1代表です。市民の多くが待ち焦がれていました。7年ぶりの出場です。おめでとうございます。

このコラムの執筆時には両者のその後はおわかりませんが、彼らの頑張りやコロナ禍の今年だからこそ大きな意味があると私は思っています。

## ■スポーツの力

高校野球。春夏の甲子園。もちろん私たちは秋田のチームをいの一歩に応援します。これは当然です。面白いのは地元チームが負けた後です。次にどこを応援するのか。たいがいの人々が東北地方のチームを応援し始めます。それはなぜでしょうか。

一般的に私たちはより身近なチームやプレーヤーを応援します。ときにその競技を全く知らなくてもです。たとえば、昨年のラグビーワールドカップ日本大会がまさにその典型です。思い返してみてください。ラグビーの試合を一度も見たことのない人たちがまでもが熱狂的フ

アンになり、急にラグビーの専門家になったりしていませんか。

なぜ人々はスポーツを通じて、そのプレーヤーにシンパシーを感じたり、時にはエンパシーを抱いたりするのでしょうか。それは、そこに自らの存在を感じ、ときに自らを投影することができるからであり、無意識の中に自らのアイデンティティーを確認することができるからです。

つまり、勝てば歓喜し、負けると悔しがり、涙もなく号泣したりするのは、そのチームやプレーヤーと自分が一体となっているからなのです。

コロナ禍で、真つ先にその存在意義が問われたのはエンターテインメント業界でした。文化・芸能、そしてスポーツです。私は逆だと思っています。むしろこういう危機のときだからこそ、文化・芸能・スポーツの存在意義と必要性が再認識されるべきだと思います。スポーツが人々に与える力、特に子どもたちに与える感動や勇気は、目には見えませんが限りなく大きいはずですよ。

## ■コロナ禍だからこそ

少し別の話をします。若い頃、「チップス先生さようなら」という映画を見ました。名画です。

第1次世界大戦下のイギリスです。学校での授業中、ドイツ軍の空爆を受けま

す。生徒たちはパニックになり、授業どころではなくなりました。そのときチップス先生が次のようなことを言います。

「こんなときだからこそ、私たちは学ぶことをやめてはならない。」

そして先生は、生徒たちを着席させ、授業を再開するのです。

これまでも繰り返して述べていますが、コロナ禍の中きまざまな声が聞かれます。とにかく自粛を求め、逆に対策より経済だという声などです。

最後はバランスです。コロナに敏感になり過ぎてはいけませんし、逆に軽視し過ぎてはいけません。ただ、ここで言いたいのは、危機のときだからこそ、私たちに立ち止まらずにやるべきこと、やらなければならないことがあるはずだということです。その意味からも、冒頭で述べたように、ブラウブリッツ秋田とTDK硬式野球部による活躍は、今まで以上に価値あるものだと思っております。



にかほ市長  
市川雄次